３年Ｚ組 銀八先生～異次元からの転校生だよコノヤロー～

ウィン・ツバサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
３年Ｚ組　銀八先生～異次元からの転校生だよコノヤロー～

【Ｎコード】
Ｎ３４１８Ｎ

【作者名】
ウィン・ツバサ

【あらすじ】
言わずと知れた銀魂高校３年Ｚ組。
そこに五人の転校生がやってきた。
５０メートルを４秒で走る俊足ジジ臭少年に、その姉の清楚系大和撫子、北〇康介も真っ青のかわいい系マーメイド、ジジ臭少年に引けを取らない俊足無愛想少年、ハーバード級の頭脳を持つ不思議系天才少女。
その他にもちょっと抜けた司書、ツンデレ保険医等。
こいつらが３Ｚにどのような旋風を巻き起こすのか、刮目せよ！

注：この小説は様々なパロディ要素がふくまれています。（これは単なる字数稼ぎ。でもパロディはホント）

第一講　テストは学力じゃなく、心意気を見る物（前書き）

繋がる心が　俺の力だ！
（ソラ）

金平糖が　俺の力だ！
（ウィン・ツバサ）

あ、この人糖尿予備軍だ
（志村新八）

第一講　テストは学力じゃなく、心意気を見る物

銀魂高校。
風変わりな名前だが…
新八「って、もういいわ！！　今頃こんな説明しても意味ないでしょう」

と、ツッコミを入れたのは、志村新八
ボケキャラの宝庫である３Ｚでゆういつのツッコミで、アイドルオタクのダメガネジミーだ。

新八「何だよ！　アイドルオタクのダメガネジミーって！」

ノリってやつ？

新八「ノリじゃねーよ、もうしゃべんな作者！！」

は～い

銀八「朝からうるせーぞ。ヒーローショーで舞い上がるガキ共ですかコノヤロー」

教室に入ってきたのは、３Ｚの担任、坂田銀八
眼鏡も白衣も全てをだらしなく身につけ、白髪天パに死んだ魚のような目、糖尿気味。教師としてあるまじき人物だが生徒達に一目おかれている。

銀八「お～い、突然だが今日は、転校生を５人紹介すんぞ」

もちろん周りの生徒は、騒ぎだす

先生、転校生に女子はいますか？　その女子は美人ですか？　その女子は乳デカイアルカ？　その中に弄り甲斐のあるメス豚はいますかィ？

あ、最後のは沖田ね。

銀八「お～い静かにしろ～とりあえず入って来て～」

と、言われて入って来たのは…茶髪に茶色い瞳、一緒にいてなんだか和むオーラを放っている少年と、ちょっと変わった青い髪と青い瞳のかわいい系の少女と、黒髪に黒い瞳の大和撫子を思わせる美人、同じく黒髪に黒い瞳の少々無愛想な少年、最後に黒髪に金色の瞳のどこかふわふわしている少女の５人だった

銀八「紹介は…メンドくさいから適当によろしくぅ」

新八「仕事しろよ給料ドロボー！！」

どこまでもやる気がない銀八に新八がつっこむ

銀八「ったく…うるせーな、分かったよ…んじゃお前からな」

と、指差したのは茶髪の少年だ

ウィン「俺ッスか？！え～と…俺は、ウィン・ツバサ。好きな食べ物は金平糖で、作者とは一切関係ねーぞ」

銀八「確かに作者もウィン・ツバサだったな。はい次～」

次は、青い髪の少女だ

アクア「っあ、はい…アクア・マーキュリーです。得意なことは水泳です。よ、よろしくお願いします」

銀八「よし、次～」

黒髪の美女

スワン「スワン・ツバサと言います。ウィンの姉です、兄弟なのに同じ学年と言うのはそこはそこ、ご都合主義です」

銀八「お～い、ご都合主義とか勝手喋るな～。は～い次～」

無愛想な少年

カーネル「…カーネル・ブラックだ…よろしく」

銀八「お～いもっと喋れ。あそこの学級委員みたいに友達減るぞ」

と、学級委員の桂小太郎を指差しながら言う

桂「先生訴えますよ、今すぐにでも裁判出来ますよ？」

銀八「よ～し、次」

銀八は桂をあっさり無視

最後は、金色の瞳の少女

ティファ「ティファ・ホーリーでーす♪　よろちくわ～」

銀八「ち…ちくわ？」

神楽「ちくわ！！ちくわは、どこアルカ？！」

真っ先に反応したのは、神楽だ

新八「神楽ちゃん、ダジャレだから」

銀八「…まぁいい、そんじゃ席は……てきとーに空いてるとこ座れ。あとは、自分らで勝手に挨拶しとけ、んじゃ号令」

「起立、気をつけ、礼、銀魂」

新八「いつまでやるのコレ？」

♪♪♪

銀八「テストやんぞ、来週」

「「「え～！！」」」

新八「ちょっと待って下さい何でいきなりそんな話になるんですか！？」

新八が異義を唱えるが、それをスルーして銀八は続ける

銀八「あ～、あとそのテスト、クラス平均３５０点以上取れよ。じゃねーと再来週以降、俺の授業全部バスケしながら『論語』詠んでもらうから」

新八「またそれですか！」

土方「３５０点以上？？そりゃ無理ってもんッスよ」

新八「どーゆう事か説明して下さい」

銀八「実はよ、さっきの休み時間校長室に呼ばれてよ……」

すると銀八は言葉をそこで区切り

銀八「つーか、話すのかったりーから、回想シーンにまとめるわ。ウィンあと頼んだ」

新八「ってそれ何回目ェェェェ！？」

ウィン「つか俺ェェェェ！！」

新八「いや、違うから！作者の方だから！！」

銀八「はい、ズーム・イン」

♪♪♪

校長「来週、自己診断テストがある」

銀魂高校第なん代目かの校長、ハタ校長が口を開く。

『へぇ～、へぇ～』

それに銀八は、どこからか取り出した？トリビアのアレ（名前忘れた）？で応える。

校長「いや、トリビアじゃないからね、何も珍しくないからね」

静かに起こる校長。

教頭「坂田先生、真面目に聞きなさい！」

教頭が一喝。

銀八「わーってますよ」

そう言って銀八は、ポケットから板チョコを取り出してかじる。

校長「もう…いい加減にしてくれ」

校長は頭を抱える。

銀八「んで？　自己診断テストがどうしたんですか？」

板チョコをしまう銀八。

校長「そうそう、坂田先生、この自己診断テストで３Ｚにクラス平均３５０点以上取らせるように」

銀八「３５０点？　それは無理ってもんですよ、組長」

校長「校長ね。それホントにやめて」

銀八「知ってるでしょ、あいつらのババロアブレインを」

銀八がそう言うと、校長は黙って書類を銀八に渡す。

銀八「なんすかこれ？」

校長「例の転校生の成績じゃ」

銀八「……マジで？」

書類に目を通して、絶句する銀八。

校長「Ｚ組連中の立場が地上だとしたら、そいつらはさしずめバベルの塔の頂上じゃな」

銀八「そんな奴らが、なんでここに？」

校長「さあな、理事長も詳しくは語らなかったからな。とにかく、これでわかったじゃろ」

銀八「これなら３５０って数字も納得だな。特にティファ、あいつホントに高校生か？」

校長「とにかく３５０点じゃ。これがクリアできなかった場合、Ｚ組全員、放課後残って補修！」

と、残酷な事を言う村長

校長「いや、校長ね。作者もボケるな！！　それと坂田先生、あんたの給料３０％カット」

校長がそう言った刹那！

ブチッ！

銀八が目にも留まらぬ速さで校長の触角を引きちぎった。

校長「ギャアアア！！　なぜちぎる！　ていうか今一瞬何が起きたかわからんかったぞ！」

銀八「ふざけんな！　あいつらのせいで何度も何度も給料カットされてんだぞ！　これ以上給料カットされてたまるか！」

そう、銀八は自分の生徒達のせいで何度も給料カットされているのだ

校長「給料カットが嫌じゃったら３５０点以上取ることじゃな」

と、校長が言うと銀八はため息をつき

銀八「わーたよやりゃいいんでしょ、やりゃあ」

と、言い残して校長室から出て行った

校長「本当に大丈夫かのぉあいつら」

教頭「大丈夫だろ、あの五人がいるんだからよぉ」

校長にタメ口の教頭

校長「あいつらの頭の前にお前の言葉使いを正してやろうかこのクソジジー」

♪♪♪

銀八「…と、言う訳だ」

新八「と、言う訳だじゃねぇ！！何勝手なこと言ってんだ！　３５０点以上なんて無理に決まってんじゃないすか」

と、絶望的になる新八
すると新八の姉のお妙が

お妙「新ちゃんさっきの話ちゃんと聞いてた？」

と、言うと全員が転校生五人の方を向く

銀八「お前らの学力とそいつらの学力はの差は遥か彼方、ファーラウェイだ。特にティファは他四人の更に上、ていうか高校生の更に上、ハーバード級だぞ」

と、銀八が力説した
それにティファは

ティファ「いや～それほどでも～」

と、テレる

新八「ハーバード…」

絶句する新八。

神楽「ハーバードって何アルカ？」

神楽の質問に

新八「ハーバードって言うのはアメリカ（？）にある世界一頭の良い（？）大学の事だよ」

新八が答える。

土方「オイオイ、ホントにこのちゃらんぽらんにそんな学力があんのか？」

土方は隣に座るティファを指差して疑問を口にする。

ティファ「ちゃらんぽらんじゃないもん！」

土方の物言いに頬を膨らませるティファ。

アクア「ホントだよ」

ウィン「ティファは、俺達の中で一番頭が良いぜ」

アクアとウィンが土方に言ったがにわかに信じ難い

ウィン「まっ、ちゃらんぽらんなのは間違いないがな」

ティファ「ウィンまでヒドイよ～、え～んえ～ん」

嘘泣きするティファ。

この時、Ｚ組全員の心が一つになった。

Ｚ組全員（ティファ、ホントに高校生か？）

するとそこにさっきまで無口だったカーネルが立ち上がりティファの席まで歩み寄り

カーネル「…ティファうるせーそれ以上騒いだらスワン姉に頼んで晩飯ヌキにして貰うぞ」

カーネルが言った途端ティファが大人しくなり

ティファ「大丈夫！！もう騒がないから、良い子にしてるから」

と、目に涙を溜めてカーネルに言う

Z組全員（ティファ、ホンットに高校生か？）

銀八「まぁ、とりあえずテスト対策に放課後残って勉強会な。わかんねーところは、転校生にでも聞け。んでお前らはてきとーに分担してわかんない奴らに教えてやってくれ」

銀八は、全員にそう伝えると教室を出て行ってしまった

♪♪♪

放課後

スワン「今日は、あなた達の学力を見るために小テストをします」

スワンが即興で作った小テストが配られる

ウィン「時間は十分範囲は大体高３の今まで習ったところの特にテストに出やすいやつだけだから基本的に簡単だぜ」

ウィンが説明する

ティファ「そんじゃ、よ～い始め」

ティファの合図で一斉に書き出すが…

Z組全員（全然わかんねー！！）

大体そうなのだ、基本的な事が出来ていたらこんな事しなくても良いのだから

～十分後～

アクア「終了です。前に持って来てください」

そして小テストを見たカーネルが

カーネル「……予想外だな…」

ティファ「これは…勉強以前の問題だね…」

ウィン「中には、なんとかなりそうな奴もいるけど……」

するとスワンが中から選ぶと

スワン「とりあえず…神楽ちゃん、近藤君、長谷川君は最低ランクだから私がついて教えるよ」

更にまた数枚選んで

スワン「桂君、柳生さん、土方君は、基本が大体出来てるからテストに出てくるところをひたすら覚えて貰うからウィンがついてくれる？」

それにウィンが頷くとカーネルが

カーネル「あとの奴らは、まず最初に基本のマスターからだ。国語はスワン姉、数字はアクア、英語はティファ、理科はウィン、社会は俺授業形式で教えていく…と、まぁこんな感じだ」

と、大方の流れを説明した

神楽「はいはいは～い、なんで私が最低ランクアルカ」

神楽の質問にティファが

ティファ「だって、テストに名前しか書いてないもん」

神楽「それは、テストに魔法が掛かってたアル、テスト終わるまで違うところに飛ばされネ」

新八「んな訳あるかァァァ！！嘘つくならもっとましな嘘つけや！！」

新八のツッコミが飛ぶ

近藤「俺も、納得いかねーなんで俺も最低ランクなんだ」

それに今度はカーネルが

カーネル「テストに『お妙さん』としか書いてないからだ」
すると近藤さんの頭にコンパスが刺さる
お妙「なに書いてくれてるのかしらこのゴリラさん」
更にシャーペンも刺さる
その後は、もちろんフルボッコ
カーネル「勉強以前の問題だな…」
と、少々頭痛を覚えたカーネル
新八「なんか…すみません」
アクア「大変だね、新八君も」
アクアから同情を得た新八だった
後編に続く

第二講　１００点取るのがテストじゃない（前書き）

男ってのは言葉よりも行動で示す生き物だから
（マース・ヒューズ）

お妙さーん！　結婚してくれー！
（近藤勲）

ゴリラさん、骨も残さずに蒸発して
（志村妙）

あ、近藤が消えた
（ウィン・ツバサ）

第二講　１００点取るのがテストじゃない

２日目

スワン「国語を始めます。先生も手伝ってください」

銀八「かったりーなー」

そう言いつつも教壇に上がる銀八。

新八（問題なく済めばいいけど…）

心の中で祈る新八。

しかし、その祈りは無情にも届かなかった。

～五分後～

近藤「がはぁ！」

近藤がいきなり血を吐いた。

スワン「近藤君！？」

長谷川「目が、目がァァァァァ！！！」

目を押さえ悶える長谷川。

ウィン「長谷川！？」

ティファ「ちょっ！　神楽ちゃん何してるの！？」

ティファの目に写った物は、ワークブックをムシャムシャと食べる神楽だった。

アクア「どうなってるの！？」

カーネル「……」

その他にも、自分を縄で縛るさっちゃん、頭から煙を出す桂等々、その光景はまさに地獄絵図だった。

銀八「？発作？が出たな」

スワン「？発作？？」

スワンが聞くと銀八が

銀八「あいつらは、長い時間？勉強？と言う物をすると発作を起こしてしまうバカ特有の病気を持っている」

銀八の説明に転校生一同が頭を抱える。

ウィン「長い時間って、まだ五分しか経ってねーぞ」

銀八「あいつらにとっての五分間の勉強は一年間の勉強に等しいんだよ」

転校生組「……」

黙ってしまう転校生組。

銀八「あ、ヅラ頭爆発した」

♪♪♪

三日目。

ここまで来ると、Z組の勉強アレルギーは更にひどくなる。

土方はケチャップを啜り、神楽は何かに取り憑かれたかのように意味不明の言語を喋り出し、長谷川は血の涙を流す始末。

そして、初っぱなから吐血という重症を起こした近藤に至っては、全身の穴という穴から出血多量で死ぬんじゃね？　という程の血を噴き出していた。

アクア「み、みんなが怖い」

怖がるアクア
するとスワンが

スワン「先生、これ以上やったら危険です。命に関わります、今すぐ中止して下さい」

先生に異議を唱える

銀八「大丈夫だ、心配ねー…おい、オメーらいいか全員が今回のテストノルマクリアした暁には、理事長に掛け合って一週間休めるようにしてやる」

と、全員に言った銀八

ウィン「いいんですか？そんなことして」

沸き立つＺ組を尻目にウィンが聞く。

銀八「なーに、元々あいつら成績なんてニヤリーイコールゼロなんだ、痛くも痒くもねーよ」

そして、もう一度全員に向き直り

銀八「死ぬ気で７０点取ってみろやァァァァァ！！」

その言葉でさらに沸き立つ３Ｚメンバー

そして、その後からの３Ｚは凄かった。

ウィン達が言ったことを片っ端から覚えていき五日目には普通にノルマクリア出来るほどになっていた

カーネル「…なんだこの代わり様」

ティファ「これなら、ノルマクリアも目じゃないね♪」

スワン「本当、スゴいね」

ウィン「ああ、別の意味でスゴいな」

アクア「そこまで勉強嫌なのかな？」

と、感心しつつもちょっと引き気味に五人だった

♪♪♪

そして、テスト当日

銀八「は～いそんじゃテスト始めんぞ」

銀八の気の抜けた声でテストを開始した

そして……

新八（す、すごい…解けるぞ！！マジで僕らバカばっかりだぞ！夢か？夢なのか？？）

３Ｚ全員が新八と同じように自分たちが問題をスラスラ解いているのに驚く。

開始３０分で見直しなどと言う事をしている生徒も出てきた

もちろん前までのならばあり得ない事だ

さらに、ウィン達五人はもうそれすらも終わってペンを置いていた。

♪♪♪

数日後

銀八「お前ら…やってくれたな…」

銀八は震えながらそう言った

新八「ど…どうしたんですか先生？」

新八がおずおずと聞く。

銀八「クラス平均…４００点だ」

Ｚ組「……」

静寂に包まれる教室。

Ｚ組「ゑゑゑゑゑゑゑ！！？？」

あまりの衝撃に銀八の言葉を理解するのに少々時間がかかった

え？え！？　マジかよ！？　４００点！？それってつまり、一教科８０点！？　ウィンたちのお陰だよ！！　祭じゃ！！

などと、歓喜の声をあげるＺ組。

すると銀八がウィンに近づき

銀八「なぁウィン、理事長を説得すんの手伝ってくんね？」

すると、ウィンがニコッと笑って

ウィン「それじゃ、ざっとこれぐらいで手を打つぜ」

ウィンは、銀八に電卓を見せた

銀八「金取んのかよ！！」

その後、ウィン達の巧みな説得の後３Ｚは一週間の休みを貰った

新八「一体何者なんだ？？」

彼らの謎は、深まるばかりであった

第三講　長期休暇って終わると萎えるよね（前書き）

敵に後ろを見せない者を、貴族と呼ぶのよ！
（ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール）

同感だ。
貴族たる者、誇りは守らなければならぬ。
（朽木白哉）

何が誇りだ、ゲスの貴族にプライド云々説かれたくない。
（シオン・アスタール）

…散れ、千本桜。
（朽木白哉）

求めるは雷鳴＞＞＞・稲光！
（シオン・アスタール）

オイィィィ！　アンタら何作品を越えた争いしてんの！
（志村新八）

第三講　長期休暇って終わると萎えるよね

自己診断テストが終わり、クラス平均４００点というこのクラスでは地球が滅びても有り得ない快挙をやらかして、有給休暇をもらった銀八以下３年Ｚ組。

♪♪♪

甘味処『金色堂』。
かぶき町駅前に新しくオープンした、美味しい和菓子・和スイーツを出すと評判の店。

そこに、坂田銀八の姿はあった。

♪♪♪

店員「ご注文をどうぞ」

銀八「そうだなぁ、抹茶パフェ一つ」

店員「抹茶パフェですね？　少々お待ち下さい」

店員はそう言うと去って行った。

その間銀八は買ったジャンプを読む。

数分後。

店員「お待たせしました……って銀八先生！」

店員が銀八の名を呼ぶ。

銀八「ん？　スワンじゃねーか。バイトか？」

そこに居たのは、可愛らしい振り袖姿のスワンだった。

スワン「はい、……それより何でこんな所に居るんですか？」

銀八「何？　俺がここに来たらダメなの？」

スワン「いえっ！　そう言う意味じゃ…」

銀八「わーってるよ。美味いパフェが食えるって聞いてよ、来てみた」

スワン「先生は意地悪ですね。抹茶パフェです」

スワンは微笑みながら銀八の前にパフェを置いた。

銀八「お、美味そうじゃねーか」

スワン「あの…」

スワンがもじもじしながら銀八に声を掛ける。

銀八「んあ？　どーした？」

スワン「もう少しでアルバイト終わるんですけど、かぶき町を案内してくれませんか？」

やはり、ちょと恥ずかしそうに言うスワン

銀八「ん～…まぁ、ヒマだったしいいぜ。早くバイト終わらせて来い」

すると、スワンは嬉しそうに笑ってバイトに戻った

♪♪♪

スワン「先生すみません、少し遅れちゃって…」

銀八「ん？気にすんな。おらさっさと行くぞ。ほら、メットだ」

スワンにメットを投げ渡す。

スワン「はい！」

「銀」と書かれた原チャリに跨がる銀八とスワン。

♪♪♪

神楽「あれ？銀ちゃん、スワン、一緒に何してるアルカ？……はっ！まさかデートか！デートアルカ！！オメーそれでも教師アルカ！！」

新八「先生…そんな人だったなんて……」

お妙「あらあら、先生昼間っから生徒をタブらかさないでください

よ」

しばらく歩くと神楽と志村兄弟に出くわした

銀八「お～い、もっとよく状況見ろ～、俺これでも一応教師だから」

スワン「そ、そうですよ！私が先生に案内を頼んだんです／／／」

スワンは、顔を真っ赤にして反論する。

新八「なんだ、そうだったんですか～、てっきり先生が間違いを犯したのかと……」

銀八「お～い、新八！てめぇはツッコミだろーが！何勝手に変な勘違いしてんだよ」

神楽「そうアル、だからオメーはいつまでたっても新八のままなんだよ！！」

神楽と銀八が新八を責める

新八「ツッコミ関係ないじゃん！あと、全国の新八さんに謝れ！！」

いつものやり取りを繰り広げる三人

お妙「新ちゃん、神楽ちゃん早く行かないとハーゲンダッツ売り切れちゃうわよ。今日ハーゲンダッツの半額日なの、じゃあ私達は行くわね、じゃあねスワンちゃん、先生」

神楽「アネゴ～待つネ～」

新八「さようならスワンさん、先生……姉上、待って下さい」

三人は、そう言って走って行ってしまった。

スワン「……行っちゃいましたね」

銀八「俺達も行くか」

再び街を走る二人

♪♪♪

今、桂の家に来ている。

ていうか、銀八が勝手に上がり込んだ。

桂「先生、来るんだったら前もって言って下さい、片付けしないといけないんですから」

桂は怒るが、これって男の部屋？ってぐらい片付いていた

スワン（う、うちも片付けておかなくちゃ……っていうか桂君の家片付ける必要あるの？綺麗すぎる部屋なんですけど…）

スワンの家も片付いているが桂の家ほどではない

桂って潔癖症なのか？

桂「っていうか、先生は何でスワン殿と一緒に？」

スワン「スワンでいいですよ桂君」

桂「そうか？ならば、先生は何でスワンと一緒いるのだ？」
改めて聞き直す桂
銀八「ん～？スワン引っ越して来たばかりだろ、だから街案内してんだよ」
銀八が答えると桂は
桂「そうか、スワンいつでも遊びに来てくれていいぞ」
それにスワンは頷いた
♪♪♪
スワン「先生、次はどこに行くんですか？」
スワンが尋ねる。
銀八「次は…そうだな、九兵衛ん家にでも行くか」
♪♪♪
スワン「うわ～…ここが柳生さんの家ですか…お、大きい家ですね……」
スワンが九兵衛の家を見て素直な感想を述べる
九兵衛の家は、スワンの想像していたものより数倍デカかったからである
銀八「ま、九兵衛は俗に言うセレブのお嬢様だからな」

銀八が説明していると丁度九兵衛が外から帰って来た

九兵衛「ん？先生にスワン殿でわないか、僕の家の前で何をしているんだ？」

スワン「あ、柳生さんこんにちは」

挨拶をするスワン

九兵衛「スワン殿、柳生さんは堅っ苦しい九ちゃんと呼んでくれないか」

スワン「だったら…九ちゃんも私の事呼び捨てでかまわないですよ」

すると、九兵衛はちょっと恥ずかしがりながら

九兵衛「そうか…なら、スワン達は僕の家の家で何をしているんだ？」

と、もう一度聞き直す

銀八「あぁ、スワンまだこっちに越して来たばっかりだからな、街案内ついでに３Ｚ連中の家を紹介してんだ」

銀八が説明すると九兵衛は納得したようで、スワンに向き直り

九兵衛「そうか、そう言う事なら少し上がって行くか？」

上がって行くことを進めるが銀八断ろうとした時、いきなり東城が現れて

東城「若、いけません！！こんな転校してきたばかりの正体不明な者を家に上げるなど…危険すぎる、私が許しま…」

そこで、東城に九兵衛の回し蹴りが炸裂した

そのまま九兵衛はスワンに向き直り

九兵衛「すまない、気を悪くしないでくれ。東城も悪気は無かったんだ」

そう言って、東城の代わりに謝る

スワン「そんな、いいですよ。それに転校してきたばかりで信用ないのはわかってますから」

スワンは、笑顔でそう言った

銀八「おい東城見ろよ、あんな真っ正直なやつが危険なわけねーだろーが」

東城「うぅ…そうですね……」

銀八と東城が隅っこの方で話す

スワン「先生、次行きましょう」

スワンが銀八を呼ぶ

九兵衛「本当に寄って行かないのかスワン？」

九兵衛がちょっぴり寂しそうに言う

スワン「はい、また今度遊びに来させてもらいます」

そう言ってスワンは銀八を引っ張って行ってしまった

♪♪♪

そんなこんなで銀八は街のいろいろな所にスワンをつれ回し現在時刻は午後7時

スワン「今日は、色々とありがとうございました」

スワンは、銀八に家の前まで送ってもらった

銀八「ん？気にすんな、俺も今日は丁度暇だったしな。またなんかあったら言えよ、俺一応お前の担任だからな」

銀八がそう言うとスワンは嬉しそうにうなずいて

スワン「はい、ありがとうございます。…先生といるとなんだか落ち着きます」

それに、銀八は

銀八「和みキャラだったらウィンじゃねーか？？あいつ和ませオーラ放ってんじゃん」

と、笑ったが、スワンはちょっと寂しそうに笑う

スワン「ウィンは、私の前では、私にあま気を使わせたないようにしてるんです……アクアやカーネルやティファだって私にあまり負担がかからないように気を使うんです……一緒に住んでるんだから気なんか使わなくてもいいのに……」

銀八「お前ら一緒に住んでんのか？」

銀八は、スワンの話を最後まで聞くと質問した

スワン「あ、はい。私達は元々同じ孤児院で育った幼馴染みなんです」

銀八「そりゃあ大変だな、お前一人で家計支えてんのか？」

また銀八が質問する

スワン「いえ、カーネルとウィンは最近バイト始めたし、アクアとティファも家事とか色々家のこと手伝ってくれるから、そこまで大変じゃないです」

スワンが答えると、銀八はスワンの頭を撫でて

銀八「だったらいいじゃねーか、あいつらはお前に気を使ってるんじゃなくて自分たちにも頼って欲しいんだよ」

と、スワンに言った

スワン「頼る？ウィン達を……」

銀八「ああ、お前は一人で全部抱え過ぎなんだよ、もっと周りの奴らに頼れよ」

すると、スワンは少し考えて銀八に
スワン「……そうですよね…ウィン達はずっと私が頼って来るのを待っているんですよね…」
と、呟く
すると銀八は
銀八「それとも、お前はウィン達のことが嫌いか？」
また質問する
すると、スワンは
スワン「嫌いじゃありません、むしろ大好きです！！カーネルとアクアとティファはもう家族も同然だし、ウィンは私の自慢の弟です」
満面の笑みでそう答えた
すると銀八も嬉しそうに笑って
銀八「そうか、だったらもう大丈夫だな」
スワン「！！／／／」
銀八の笑顔についつい赤面してしまったスワン
銀八「じゃあな、また休み明けに学校でな」
銀八は、スワンに気にすることなく帰って行ってしまった

スワン（……休み明けか…楽しみだな／／／）

少しばかり胸を踊らせるスワンであった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3418n/

３年Ｚ組 銀八先生～異次元からの転校生だよコノヤロー～

2010年12月11日14時22分発行